

愛の讃歌は愛の謳歌か？

—Donneの*Elegies*の場合—

岡村 眞紀子

20編ほどからなるDonneの*Elegies*は愛の詩集である。一見したところ、*Songs and Sonets*と同様、愛を謳歌する詩と、愛への、恋人への懷疑をうたう詩とにわかれる。

I'll goe, and, by thy kind leave, leave behinde
Thee, onely worthy to nurse in my minde
Thirst to come back ; oh, if thou dye before,
From other lands my soule towards thee shall soare.

(‘On His Mistris’ ll. 15–18)

また例えば、

Full nakedness, all joyes are due to thee.

(‘To His Mistris Going to Bed’ l. 33)

このように恋人への真摯な心情を吐露するかと思うと、愛の営みに酔い痴れる。
が、一方例えば、

Marry, and love thy Flavia, for, shee
Hath all things, whereby others beautious bee,
For, though her eyes be small, her mouth is great,
Though they be Ivory, yet her teeth are jeat,
Though they be dimme, yet she is light enough,
And though her harsh haire fall, her skinne is rough ;
What though her cheeks be yellow, ' her haire is red,
Give her thine, and she hath a maydenhead.

These things are beauties elements, where these
Meet in one, that one must, as perfect, please.

(‘Anagram’ ll. 1 – 10)

と女性を冷笑し、

Although thy hand and faith, and good workes too,
Have seal’d thy love which nothing should undoe,
Yea though thou fall backe, that apostasie
Confirme thy love ; yet much, much I feare thee.

(‘Change’ ll. 1 – 4)

と女性の愛に不信の念を抱く。

が、これらの詩は、単にそれだけのものであろうか。一編一編を読み通して心に残るものは、そうではない。Donneの愛への想いの真実は一切何か。ここでは彼の愛を肯定的にうたった詩をいくつかとりあげ、Donneの愛の謳歌の底に潜む心をさぐってみようと思う。

‘On His Mistris’は、‘His Picture’と共に、別かれに際して自分の想いをうたい、恋人の変わらぬ愛を求めてうたう詩である。うたい出しから‘our first strange and fatall interview’ (l. 1) と熱烈な2人の出会いをほのめかし、‘Here I unsweare, and over-sweare then thus ; Thou shalt not love by means so dangerous’ (l. 11–12) と恋人への沈潜した、しかし真に激しい慕情をうたうにあたり、Donne独特の饒舌さを発揮する。

By our first strange and fatall interview,
By all desires which thereof did ensue,
By our long sterving hopes, by that remorse
Which my words masculine perswasive force
Begot in thee, and by the memory
Of hurts which spies and rivalls threatned mee,
I calmely beg ; but by thy parents wrath,
By all paines which want and divorcement hath,
I conjure thee ; and all those oathes which I
And thou have sworne, to seal joint constancie,

(‘On His Mistris’ ll. 1 – 10)

‘Be my true Mistris’と願うからこそ、‘Thou shalt not love by means so dangerous’であり、‘Temper, oh faire Love, loves impetuous rage,’とってしまうDonne。‘Be my true Mistris’というストレートなことばの紡ぎ方の裏にべったりとはりついて、だからこそ‘Temper’といわざるを得ない屈折した思考方式。男性が宮仕えで旅発つとき、妻や恋人が小姓に変装してついていくのは、当時としては珍しいことではなく、文学の中にもしばしばみられることであった。身体の装いを変えることなど上辺のことにすぎない。‘absent lovers one in th’other bee.’ (l. 26)なのだから、物理的に別かれても、何も変わりはない。2 = 1というDonneお得意の数学遊び。否、これは極めて真面目な論理なのだ。誰もが信じて疑わぬ1 = 1, 1 + 1 = 2の数式を黙って鴉呑みにしない、またできないDonneの精神構造がここにある。この論理はSongs and Sonetsの中でも、何度も何度もくり返される。しかし、Donneにとって極めて心に重いはずのこの定理が、実は‘flatterye’なのである (l. 2)。これは一体どういうことだろう。Donneは自分の論理、信念まであざ笑ってしまう。だから、‘Augure mee better chance, except drede Jove/Think it enough for mee, to’have had thy love.’ (ll. 55-56)と但し書きをつける。この節は、そうはなってほしくないけれど、というDonneの気持ちなのか、はたまた所詮そうなのだが、という気持ちなのだろうか。全体を読んできてこの一節がでてくると、どうも後者の方に思われてならない。

同じ別かれのうた‘His parting from her’は恋人の方が去っていく詩である。恋人が去っていくことは文字通りhellであるが、Nightも冥府のgreate Hellもこの恋人との別れのhellに比べると影にすぎない。それほどに恋は至福のものなのだ (ll. 1-6)。Loveとはfireとdarknessとがないまざったもの。愛の成就には‘soe strange torments’こそふさわしい (ll. 13-14)。Donneは敢えて‘strange’という形容詞を冠するが、恋につきまとう別かれの苦しみは少しもstrangeなものではない。Cupidが盲目だから恋は闇に閉ざされるもの、というのも珍しい論理ではない。ここでうたいあげる愛はこの世の愛。恋人は四元素から成り立ちquintessenceのかけらもない。

But straight her beauty to my sense shall run ;
The ayre shall note her soft, the fire most pure ;
Water suggest her clear, and the earth sure.

(His parting from her’ ll. 74-76)

その愛も肉体あつての愛

Or have we left undone some mutual Right,
Through holy fear, that merits thy despight?

(His parting from her’ ll. 19-20)

引き裂かれぬよう2人が1つになろう。またもここで「2人」の恋人は「1つ」になる。これは世の恋人たちにとって何の不思議もない数式だが……。

First let our eyes be rivited quite through
Our turning brains, and both our lips grow to :
Let our armes clasp like Ivy, and our fear
Freese us together, that we may stick here,

(His parting from her ' ll. 57-60)

2人の恋は季節の経巡りとともに語られ、時の移ろいで示される。地球上には夜も昼もあり、冬も夏もあるが、視野を広くして地球全体を眺めれば闇ばかりではない。冷たさばかりではない。だから‘Be then ever your selfe, and let no woe/Win on your health, your youth, your beauty : so/Declare your self base fortunes Enemy, /No less by your contempt then constancy :’ (ll. 89-92)。そうなってくると、‘I may grow enamour'd on your mind :’ (l. 93)であり、恋人に自分の愛を誓うことになる。比喩や掛詞を駆使してここまでもってきて、尚ことばを尽して変らぬ愛を5行に渡って誓う。ところが、最後にみごとにひっくり返されてしまう。

many words have made
That, oft, suspected which men would perswade ;

(His parting from her ' ll. 101-102)

100行に渡る詩行は何だったのだろうか。この100行の間のことばの展開は、今まで見てきたように、それほどDonne独特のものではない。Donneらしさは実は、この最後の詩行に残されていたのである。100行もことばを尽して語り続けてきて、実はそんなことはむなしい行為以外の何ものでもない、と知りつつ語ってきたのだと知るとき、読者は啞然としてしまう。語るべきはたった1行半、

I love so true,
As I will never look for less in you.

(‘ His parting from her ' ll. 103-104)

これだけだったのだから。

こんなむなしさの中にも生き生きと鮮明に語られた愛の姿は心に残るが、それがより鮮明に出てくるのが‘Loves Progress’である。‘The right true end of love’ (l. 2)は‘Preferre/One woman first, and then one thing in her.’ (ll. 9-10) なぜなら‘Perfection is unitie ;’ (l. 9) だから。‘one’こそ全てであり、純粋な完全性——完全性、純粋性を求める愛も、

対象をvalue (評価) するのとloveする (愛でる) のとでは求めるものが違う。valueするのはvirtueであり、そして時にはbeautyやwealthであって、loveするのは‘one’ (たった1つのもの) ——それによって女性が女性となっているものである (ll. 17-25)。Donneにとって‘one’は全宇宙を凝縮した完全体の球体。唯一であり、純粹であり、完全であり、全体。が、女性をloveし、求める‘one’はいわば‘use’ (効用性) であり、‘the soule of trade’である (l. 16) 。‘love’は商いであり、取りひきなのである。完璧を、完璧をとアピールしてきたそのloveが取りひきだ、求める女性の価値は金の価値に等しいのだ (ll. 11-16) といわれると、その落差の大きさに読者は愕然とする。しかし当時のイギリスにとってtradeを成功させることが、重要な政治の眼目の一つであったことを考えると、この比較もあながちそう突飛なものではなさそうである。だとするとDonneがひたすら求めてきた‘one’も、列国の中で‘won’になること、そして愛においても‘won’になることと思われるが、そうみてくると、この詩の後半の生き生きした愛の行為の描写がなお一層引き立ってくる。

Search every spheare

And firmament, our Cupid is not there.
 He's an infernall God, and under ground
 With Pluto dwells, where gold and fyre abound.
 Men to such Gods their sacrificing coales
 Did not in Altars lay, but pits and holes.
 Although wee see celestiall bodies move
 Above the earth, the earth we till and love :
 So we her ayres contemplate, words and hart
 And vertues ; But we love the Centrique part.

(‘Loves progress’ ll. 27-36)

何という官能的な条りであろうか。女性を1つの天球 (宇宙) とみたてるのはDonneの常套手段であるが、求める愛 (Cupid—Love) は天空にでもなく、地上にでもなく、地下 (地中) にある。そこは金の鉱脈のあるところであり、地下のfire (マグマ) の蠢くところでもある。いかに地下の資源に恵まれているかが、当時のイギリスにとって重要なことであり、その後のイギリスの世界への進出にも深く関わってくることである。そして女性の価値 (gold) も情火 (fire) もここにある。ところで愛の神Cupidと共にいるのは冥府の神Pluto—愛は一転、死の暗い影を帯びてくるが、‘die’は‘sexual ecstasy’をも示すことを思えば、また愛の暗い激しさが広がってくる。いうまでもなく、続く2行もセクシュアルな行為の表現である。女性は四元素から成り立つ。‘His parting from her’にもあったように。ここでは一番大空に近い筈のfireが地下にある。男性に耕されるearthのさらに下に燃えさかるのが愛の (情欲の) fire。女性を構成するのはその‘fire’と

‘earth, , そして‘ words ’や‘ hart ’, ‘vertues ’である‘ ayres ’。その女性の中でも最も愛しいのが‘ the Centrique part ’。宇宙の中心点は (Donneの詩における宇宙観は天動説をとるので) 地球の中心——その地下の (地中の) fire。そして女性の中心点。そこへ向かっての‘ Love’s Progress ’がはじまる。

But in attaining this desired place
 How much they stray that set out at the face.
 The hair a forrest is of ambushes,
 Of springes, snares, fetters and manacles.
 The brow becalms us, when ’tis smooth and plaine,
 And when ’tis wrinkled, shipwracks us againe ;
 Smooth ’tis a Paradise where we would have
 Immortall stay, and wrinkled ’tis our grave.
 The nose like to the frst Meridian runs
 Not ’twixt an East and west, but ’twixt two suns.
 It leaves a cheeke, a rosy hemispheare,
 On either side, and then directs us where
 Upon the Ilands Fortunate wee fall
 (Not faint Canarye but Ambrosiall) ,
 Her swelling lips : to which when we are come
 Wee anchor there, and think our selves at home,
 For they seem all : there Syrens songs, and there
 Wise Delphique Oracles doe fill the eare ;
 There in a creeke where chosen pearles doe swell
 The Remora, her cleavinge tongue doth dwell.
 These, and the glorious promontorye, her chinne,
 O’rpast ; and the straight Hellespont between
 The Sestos and Abydos of her breasts,
 Not of two Lovers, but two Loves, the nests,
 Succeeds a boundless sea, but that thine eye
 Some Iland moles may scatter’d there descrye ;
 And sailing towards her India, in that way
 Shall at her faire Atlantique navell stay ;
 Though thence the currant be thy pilot made,
 Yet ere thou bee where thou wouldst bee embay’d,
 Thou shalt upon another forrest set

Where some doe shipwracke, and no farther gett.

(' Loves Progress ' ll. 41-70)

読めばそのまま眼の前に、くっきりと、生き生きと浮かびあがってくる女性描写、それと同時に、眼前に、まるで自分が一艘の舟に乗って旅をするかのような辺りの風景が浮かんでくる。まさに地理上大発見の時代に生き、自分もElizabeth女王下の遠征の旅に赴いたことのあるDonneの手になると、なお一層鮮やかに息づいてくるのだ。新世界に舳先を向ければ、当時Canaryeを通っていたthe first Meridianを越えることもある。the first Meridianは東半球と西半球を分ける線であって、それまで西半球に限られていた視野が東半球にも向けられ、事実、船を進めることもあった。出航するまでも、既に危^{あやう}い場面が幾度かあっただろう。鎬を削って国力を上げようとするヨーロッパ諸国の中であって、さまざまのambushもあつたに違いない。一度海^{ひとたび}に乗り出しても、いつも穏かとは限らない。波が荒くなればたちまち沈没ということもあり得る。

女性に近づくのも最初がまずむずかしい。the first Meridianを越えて異性の世界に入るまではおずおずしなければならぬ。鼻筋の通った鼻で隔てられた2つの頬は2つのhemisphere。2つ合わせれば1つのspheareとなる。女性こそ一つの宇宙なのだ。2つの半球を隔てている鼻筋（本子午線）は2つのsunsの間を通る。勿論、太陽の如き恋人の瞳であるが、イギリスにとって、東半球は、西半球同様、太陽が射す希望にみちた土地（rose hemisphere）なのである。the first Meridianの通るCanaryeはブドウ酒の産地であったが、恋人にとっては酔い痴れるだけではなく、愛によって永遠の生命を得られるambrosyの味わえるところ。しかし、それを目指すものと腰をおちつけてしまったのでは、恋は実らない。鳥には船乗りを惑わすSyrens songsが聞こえるが如く、女性の唇は恋する男の心を惑わせる。誘惑のことばを囁く。たとえ真珠の歯並びをみせようと、まるで岩隠に潜む獐猛なRemoraの如く、男の船に食いついては船足を止めてしまう。途中で腰をおちつけてしまうことなくどンドン行くと細い海峡に行きつき、そこであのMarloweのHeroとLeanderの悲恋が想起される。ペトルカ派の詩人たちにとって、恋人の胸を恋の宿に喩えることはよくあることであったが、悲恋物語が想起されるとは、恋人の胸、心にまで辿りつくことがそれだけでも至難の技だとのめかされることになる。が、それだけではない。女性のthe Centrique partへ行きつくまでには、まだもう1つForestを越えねばならず、そこで足止めをくってしまうのである。

先にも述べたように、ここの詩行は読むにつれて、自分が海を船で行くかの如き光景と、女体とが、眼の前に同時にパノラミックにくり広げられ、またその両者が何の異和感もなくイメージとして重なっていく。ヨーロッパの各国が目色を変えて目指す財宝の国India。そこに辿りつくまでにSestosとAbydosの町の向きあうHellespont海峡を配するなど、新世界への旅も、恋の旅路もそう簡単なものではないことを示唆する。が、だからといって決して悲観的な感じにはならず、力強い詩行になっている。とはいえ難破してしまつたのでは仕方がない。それは出発点が道筋がまちがっていたからで、角度を変えてやり直すべし、というのがこの詩の大筋。しかしそれにしても、この

きらめくような旅路も、すべて実用性のため、となると何故かむなし。所詮愛などというものはそれだけのものなのだ、とみせつけられている気さえする。

このように数編みただけでも、結局のところシニカルな自分の眼からのがれられないDonneの姿がある。一方、ここでは取り挙げないが、愛に対し、恋人に対し懐疑を抱き、冷笑している詩には愛をいとおしみ、恋人をいつくしむ想いを潜ませている。Elegiesを書いた頃の夢多く、恋多かった若きDonneには、既に自己をいつくしみつつ冷笑し、懐疑を抱きつつ否定もできない葛藤のDonneが、彼の本質としてあったのである。

※使用テキスト：H. Gardner (ed.) , John Donne, *The Elegies and the Songs and Sonnets*
(O. E. T)

(1991年8月16日受理)

(おかむら まきこ・女子短期大学部助教授)